
不可思議

椎羅璃保子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不可思議

【Nコード】
N4249A

【作者名】
椎羅璃保子

【あらすじ】
真田を悩ませる、幸村からの深夜の電話。他愛のない日常の情景。

(前書き)

「テニスの王子様」二次創作作品、真幸です。

それはいつものように真田の眠りを破って始まった。真夜中過ぎに枕元で不意に鳴り始める軽やかなワルツの携帯着信音は、即ち心細い入院患者が救いを求めて押すナースコールと果てしなく同義だ。実際幸村の入院中、「何かあったら直ぐにコールボタンを押せ、遠慮はするな」と散々言い聞かせてきたことを、彼は退院してきた今も忠実に実行しているらしい。少々間違った形で。

眠りを妨げられることが辛くないと言ったら嘘になるが、こうして幸村に頼りにされていると感じるのは真田にとって嬉しいことだ。困っているであろう彼を一人闇の底に彷徨わせておくわけにはいかない。実際に役に立つかどうかはさておくとしても。真田はできる限り素早く電話を取り上げつつ、布団の上に胡坐をかいてきちんと話を聞く体勢を取った。今夜もきっと長くなる。

「こども電話相談室だ」

電話の向こうで幸村の嘖き出す音が聞こえたので、見事にリターンエースを決めた気分になった。これは幸先がいい。

「先生、よろしくお願いします」

笑いを含んで僅かにふるえる声がそんな風に調子を合わせる。まずまず気分を良くした真田はうんうんと頷いた。どんな難問にでも答えられそうな気がしてきたほどだ。

「今日の質問は何だ？」

普段の真田を知る者が聞いたら思わず耳を疑うほどの優しい声で、次の言葉を促す。

「質問と言うか：意見を聞かせて欲しいんだ」

「それはお安い御用だな。何について聞きたいのだ」

答える気満々だった。少なくとも、この時点までは、まだ。

「そうか、頼もしいな」

幸村の称賛の一言が耳に快く響く。真田のテンションはますます上がった。しかし何の脈絡もなく「2進法について、どう思う？」などと言われても、一体何を答えられるというのだろう。

「2進法？」

ついオウム返しにした真田だったが、それは不適切な問いだった。

特に聞きたいわけでもなかった2進法の説明が早速始まったからだ。

「聞いたことくらいはあるよな？二倍ごとに桁を一つ増やす数え方だ。0, 1, 10, 11, 100, 101, 110」

少し蓮二に似てきた、とか、どこか嬉しげに聞こえるのは気のせいだろうか、などとぼんやりと考えつつ真田は講義に耳を傾けた。

「…だから19は10011。全てが1と0」

「……」

「真田」

柔らかい声が暗に答えを催促する。詰まるところ何を聞きたいのだ、という本音は腹に呑み込んで「12進法では駄目なのか？」などと些細な抵抗を試みたら、「うん、悪くないな。じゃあそれについては、また今度話し合おうか」そうあっさりと切り返された。そんなテーマで幸村と議論するなどんでもない話だ。自分の守備範囲ではない。真田は慌てて前言を撤回した。

「いや、それには及ばん。2進法だったな、俺は悪くないと思うが。何と言うか、こう、白黒はつきりしていいという印象があるな」
「桁数は増える。32は100000」

「それは…そうだが、そうしなければ表現できない以上、致しかたあるまい」

「面倒だなあ」

「やってみると案外簡単かも知れんぞ。何しろ0と1しかないわけだからな」

「一つ聞くけど」

幸村の声が、少しかすれた。

「例えば自分の中に138967があるとするだろう。2進法で表

さないと相手に伝わらないとしたら、それでも伝えようと思うか？
相手は最後まで聞いてくれるかな？」

これが、おそらく幸村が本当に聞いたかったことだ。それを感じ取って無意識の内に携帯を握る手に力を込めながら、真田は何度も頷いた。その数字、13万何がしを2進法で表すとどれ程の数になるのかはすぐには見当も付かない。おそらく想像もできないくらいに巨大な数になるのだろうか、それでも答えは決まっている。

「どうしても伝えたいことなら、俺は労は厭わん。聞く立場だとしても、それは同じだ」

「百兆を超えても？」

「もっと大きくても、だ」

現に自分は百兆など遥かに超えて不可思議なことこの上ない幸村の話を知っている。口にしなかったその自負が真田の言葉に説得力を与え、幸村にもきちんと伝わったらしい。

「そうか、良かった：ありがとう、真田」

安心したら急に眠たくなった、とほんわり欠伸混じりの声が返ってきた。大役を無事果たしたらしいことを悟って真田も安堵する。一瞬心地のいい沈黙が訪れた。このあとはきっと幸せな気分ですぐに寝るに違いない。

だが、結局のところ事はうまく運ばなかった。

「何しろ」

一つ溜息について囁かれた、蠱惑的とすら思える言葉が、その後何度も何度も耳に甦って真田から眠りを奪ったからだ。

「“君を愛している”だけでは伝わらないことが多すぎるからな。
じゃ、おやすみ」

(後書き)

短くさらっと読める小説が好きです。

短いからこそ残る何かを封じ込めたいと思っています。

お読み下さってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4249a/>

不可思議

2010年10月8日22時12分発行